

若年層における非言語行動の研究

—若者の視線行動を中心として—

松井 恵里香

要 旨

2002年8月、若者の非言語行動についてアンケート調査を行った。アンケート調査の対象としたのは、都内に住む高校生・大学生の男女合わせて50名である。アンケート調査の内容は普段行うコミュニケーション行動、視線行動などについてなど計13項目である。

本稿では集計したアンケート結果から視線行動に関するものを取り上げ、現代の若者とステレオタイプとして言われる日本人のそれを検討した。

【キーワード】 非言語コミュニケーション、非言語行動、視線行動、まなざし、アイコンタクト

1. はじめに

日本では「人と話をする時には相手の目は直視せず、顔をやんわりと見るのが美德である」と言われてきた。そのため日本人は、人の顔をじっと見ることに抵抗があるようだ。しかし、私の身近にいる高校生や大学生を注意して見ていたところ、これには当てはまらない行動をする者が多かった。彼らは人の目をじっと見つめて話をし、対人距離も驚くほどに近い。

近年のマスメディアの発達により日本は世界との距離を縮め、海の外の様子を見、他国の文化を取り入れてきた。それにより、日本は今まで築きあげてきた独自の文化とは違った一面を見せ始めた。若者の行動のその一例といえるだろう。

言語が国によって異なるように、非言語行動も国によって異なる。日本語学校に通う学生が学校で学ぶのは日本語の知識だけである。しかし、日本人と会話をするときには日本人の非言語行動についても知っておく必要がある。ここでは若者が用いる視線行動を中心に考察し今後の日本語教育の中で役立てて行きたいと思う。

2. 視線に関する先行研究

対人コミュニケーションにおいてお互いが相手を見る時には、見られている人は見ている人の注目的になっているという情報のほかに、意思伝達の経路が開かれているという情報を得る。また、視線からは相手が自分をどのように思っているのかという情報を得ることもできる。持続した視線や凝視は他人に対する特別な関心、大胆さ、挑戦、無礼を示すのに対して、視線をはずすことは無関心、興味なし、恐怖なし、嫌悪、困惑、内気、尊敬を表す。

日本人の視線について井上氏は次のように述べている。

「日本には、古来、目通り・乳通り・肩通りということばがあった。つまり、相手の話を一言も聞き漏らすまいとする場合には、相手の目の高さ、乳の高さ、肩の幅でそれぞれ囲んだ四角形の中を見ればよい。一方、気楽に話を聞くという場合には、額の通り・おへその通り・肩幅から一寸の幅をそれぞれ結んだ範囲内」を見ればよい。

この意見を元に若者にアンケート調査をしたところ 100%全ての若者が話をじっと聞く時には、相手の目の高さ、乳の高さ、肩の幅を囲んだ四角形の中を見ていると答えた。そして、気楽に話を聞く時には、80%の若者が、額の通り・おへその通り・肩幅から一寸の幅を結んだ範囲内を見ていると答えた。つまり、井上氏の意見は若者を含んだ日本人全体に当てはまるといえるだろう。

マジョリー・F・ヴァーガス(1987)によると、外向型と内向型の人達を比べて見ると外向型の人の方が注視の頻度も持続時間も多いうのである。また自尊心が低いと判定された人達は、頻度、時間とともに少ないようである。つまり、視線行動はその人の育った文化、年齢など社会的要因に加え、その人自身の性格によっても異なるというわけである。

3. アンケート調査

3-1 アンケート調査の方法

2002年8月に都内に住む高校生、大学生50名に非言語行動に関するアンケート調査を行った。非言語行動とは、身振り手振り、表情、視線、対人距離など言語以外のしぐさで相手にメッセージを伝えることである。対象となった学生は非言語行動についての知識を全く持っていないため、先入観なしに素直な意見を聞くことができた。

アンケート内容は以下の通りである。

3-2-1 コミュニケーションに関する質問と回答

質問	回答	50名(100%)
1 言語以外のコミュニケーション手段は必要か	はい	50名(100%)
	いいえ	0名(0%)

アンケートに協力してくれた学生の全てが非言語以外のコミュニケーション手段が必要だと感じている。このことから、いかに非言語コミュニケーションが必要かがわかる。

2 非言語行動を意図的に使っているか	はい(※1)	32名(64%)
	いいえ	18名(36%)

全体の64%に当たる32名の学生が意図的に非言語行動を使っていることがわかる。質問2で「はい」と答えた32名の学生がどのような場合に非言語行動を使うか調べたところ結果は以下の通りになった。

※1 「はい」の内訳(複数回答可)

回答	人数
話の内容を本当に伝えたい時	5
話したいことを強調したい時	4
常に	4
話の内容を正確に伝えたい時	3
自分の気持ちを表現したい時	2
友達と話す時	2
言葉ではうまく伝わらない時	2
異性と話す時	2
おもしろい話をする時	1
興奮した時	1
集団で話している時	1
遠くにいる人とコミュニケーションを図る時	1
スピーチをする時	1
先生と話をする時	1
嫌いな人と話をする時	1
間が悪い時	1
年下と話をする時	1
運転中、進路を相手に譲る時	1
仲良くなりしたい時	1

※1 ことばの受信者が用いる非言語行動と送信者が用いる非言語行動の割合

送信者側からのメッセージ	25人(71%)
受信者側からのメッセージ	0人(0%)
どちらともいえない	10人(29%)

※ 1の回答がメッセージの送信者からのものか受信者からのものか見た時、「話の内容を正確に伝えたい時」「話したいことを強調したい時」などメッセージの送信者側からのものが全体の71%、「常に」「興奮した時」などどちらともいえないものが全体の29%、メッセージの受信者側からと思われるものは全くなかった。

3 周囲でよく目にする非言語行動は何か (複数回答可)	身振り手振り (※2)	30
	アイコンタクト	10
	無回答	7
	気持ちを顔に表す	3
	顔を覗き込む	1
	殴る	1
	沈黙	1
	腕を組む	1
	手をつなぐ	1

※2の内容

<ul style="list-style-type: none"> ・手を振る ・指を指す ・お辞儀 ・手を叩く ・首を振る ・握手 <p style="text-align: right;">以上の6種類</p>
--

若者の非言語行動は身ぶり手振りで表されることが多い。中でも手を用いた行動が目立つ。彼らの非言語行動は先天的なものではなく後天的に身に付けたものである。

若者の7割以上がメッセージの送信時に非言語行動を伴っていることから考えても彼らはことばの送信者である自己の責任においてコミュニケーションを行っていることがわかる。本来、日本人同士の会話は全てを言わなくても相手はわかってくれるだろうという相手への依存の上に成り立っている。しかし、若者はメッセージの送信者である自分が非言語行動を用いることでその依存性を低くしているように思う。また別の角度から考えてみると、多くの若者が非言語行動を多用する理由として、ことばでは表現しづらい部分を非言語行動で補っているように思う。言い換えれば彼らは自分の持っている語彙の少なさを非言語行動を用いることで埋めているようにも感じる。つまり若者の語彙力の低下が結果として非言語行動を発達させているのだと思う。

3-2-2 視線行動に関する質問と回答

質問	回答	50人 (100%)
1 相手のどこを見て話すか (複数回答可)	目	34 (68%)
	目と顔	6 (12%)
	顔	4 (8%)
	目と鼻	1 (2%)
	目と口	1 (2%)
	肩	1 (2%)
	全部	1 (2%)
	無回答	2 (4%)

全体のおよそ9割の若者が目か目を含むいずれかの部位を見て話している。若者がいかに目を見て話すことを重要視しているかがわかる。目を見て話すことの効果は「その人が自分をものではなく、人間として扱わざるをえないようにする」(『しぐさの比較文化』P214)ことである。話し手である若者は聞き手の目を見ることによって聞き手の関心を自分に引き付けているのである。

2 話し相手によって視線の位置を変えるか	はい (※3)	15 (30%)
	いいえ	33 (66%)
	無回答	2 (4%)

※3 「はい」の内訳

回答	人数 (15)
親しくない人と話す時には下を見る	4
無回答	3
目上の人と話す時には鼻の辺りを見る	1
身体的に特徴のある人と話す時には特徴のある部分から視線をはずす	1
嫌いな人と話す時には目を見ない	1
男女によって異なる	1
親しくない人と話す時にはキョロキョロする	1
恥ずかしい時や照れた時には視線をはずす	1
時と場合による	1
幼い子と話す時には特に目を見る	1

※3の回答を見てみると回答の多くが相手と目が合っていることを前提とし、視線を相手からははずすことで視線の位置を変えている。

5 日本人は目を見て話さないと思うか	はい	16 (32%)
	いいえ	32 (64%)
	無回答	2 (4%)

質問1で若者のおよそ9割が相手の目を見て話すと言っていたが、質問5で「日本人は目を見て話す」と答えたのはおよそ6割である。若者の9割は相手の目を見て話す、日本人全体では6割が相手の目を見て話すということになる。ここに生じたおよそ3割の差は、若者が自分は相手の目を見て話す、日本人は相手の目を見て話さないと感じているのだろう。彼らは若者を日本人とは別の枠で考えているというわけである。

質問	回答	50人 (100%)
4 相手のどこを見て話を聞くか	目	28 (56%)
	顔	14 (28%)
	手	2 (4%)
	話し手の方向	1 (2%)
	口	1 (2%)
	眉間	1 (2%)
	喉	1 (2%)
	服	1 (2%)
	未定	1 (2%)

質問1で「相手の目を含みいずれかの場所を見て話す」と答えた若者はおよそ9割であり「相手の顔を見て話す」と答えた若者は1割にも満たなかったが、それに比べ質問4で「相手の目を見て話を聞く」と答えた若者はおよそ6割である。そして「相手の顔を見て話を聞く」と答えた若者はおよそ3割である。ここから相手の目を見て話す若者は相手の目を見て話を聞く若者よりも3割以上も多いことがわかる。そして相手の顔を見て話す若者は相手の顔を見て話を

聞く若者よりも2割少ない。彼らは話を聞く時よりも話をする時に相手を見て、話を聞く時には相手の顔を見ることが多い。

質問	回答	20人 (100%)
5 会話中の視線は聞き手から話し手へ向ける方がその逆よりも多いと思うか	はい	18 (90%)
	いいえ	2 (10%)

一般的に「会話中の二人がかわるがわる話をする場合、視線は聞き手から話し手へ向けるほうがずっと多い」（『しぐさの比較文化』P219）とされる。質問5からわかるように若者の9割もその意見に同意している。しかし、質問4では、その逆の結果が得られた。つまり彼らは自分が話し手である時には無意識に聞き手へ視線を送り、自分が聞き手である時には話し手の目ではなく顔を見ていることが多いのである。話し手が聞き手を見て話すことによって得られる情報は聞き手が自分あるいは自分の話に興味があるか、話の内容が理解できているかなど会話の内容に対する聞き手の反応である。一方聞き手は話し手を見ることにより「聞いている」という意思表示をしている。「話す」という行為は声に出してするので何もしなくても相手に伝わるが「聞く」という行為は話し手の声に耳を傾けるだけでは伝わらない。そのため、聞き手は話し手に視線を合わせることで聞いていることを意思表示しているのである。

3. 考察

『異文化理解とコミュニケーション』（P263）に「日本人が相手の目をよく見ないのは、だれもがみな同じ黒い瞳をしていて、差異がないと思うからではなかろうか。黒だと色の変化が観察しにくいということもある。また、黒い瞳はそれだけで相手に対する強い刺激になるので、相手を直視しないことが礼儀作法になった」という説明がある。

アメリカ人が人の相手の目をじっと見て話をするのは相手の瞳にブルーやグリーンといった色があるからだ主張する人がいる。しかし、日本の若者は相手の瞳が自分と同じ黒であっても相手をじっと見つめる。つまり、黒い瞳から何かしらの情報を得ようとしているのである。若者の目は表情が豊かである。彼らは相手を見つめることによって、真剣に話を聞いていることを強調すると同時に相手の目から言葉以外のメッセージを探そうとしている。そして、話を聞く時に人の目を見ることが礼儀だと考えているのである。

若者の視線行動が日本人全体の視線行動と比べ変化しているのは先に述べたが、若者の視線行動を文化の面から考えてみたい。エドワード・T・ホール（『文化を超えて』P80）は、日本文化には二つの面があると述べている。一つは、コンテクスト度が高く、包容力があり、他人と深く関わりあう親密な面である。これは子供時代の家庭で培われ、年とともに交際範囲が広がればこの範囲も広くなる。二つ目は「公の場や儀式ばった席では、自己を強く抑制し、他人との間に距離を置き自分の感情は表さない面」である。若者は日本文化という大きな枠組みの中に含まれる家族という文化の中で幼い頃を過ごした。そして小学校、中学校、高等学校へと進学し、友人同士で独自の文化を形成した。日本人のステレオタイプとしてよく言われるのは、公の場では自己を抑制し、感情を表さない面である。しかし、若者が築いている文化は、他人と深く関わりあおうとする面に基盤を置いている。彼らが今までの日本人のステレオタイプに全く当てはまらないというわけではない。彼らの視線行動は変わってきている。しかし、文化の面から見たら、若者のそれは日本文化の域を越えていない。日本文化の持つ二つの面の重点の置き方が若者は少し異なるが、若者文化の根底には今でも根強く日本文化が残っている。

4. おわりに

日本の若者が人とどのようなコミュニケーションをとり、どのように人と視線を交わしているかについて考えてきた。私が高校生・大学生をアンケートの対象として選んだのは日本で日本語を勉強している就学生と彼らの歳が近いからである。日本語学校では言語についての学習はするが、その周辺知識に関する学習はあまりしない。外国人が日本人とコミュニケーションをとるときには必ず言語の他に非言語的な知識も必要になる。日本の若者は意識的、無意識的に関わらず様々な非言語行動を用いて自己を表現している。それになれる為にも就学生に非言語の教育が行われるようになることを期待する。今回はアンケートの内容が抽象的になってしまい具体的な回答を得ることができなかった。今後はより具体的なアンケート調査を行い、日本の若者の非言語行動について考え

を深めていきたいと思う。また、日本語教育の中で言語教育の他に非言語教育が行われることを期待し、そのための研究を今後の課題にしたいと思う。

参考文献

- (1) 本名信行 秋山高ニ 竹下裕子 ベイツ・ホッフア『異文化理解とコミュニケーション』 三修社 1994
- (2) 佐野正之 水落一朗 鈴木龍一著『異文化理解のストラテジー』 大修館書店 1995
- (3) リージャー・ブローズナハン著 岡田妙 斎藤紀代子訳『しぐさの比較文化』 大修館書店 1988
- (4) 水谷修・佐々木瑞枝・細川英雄・池田裕編『日本事情ハンドブック』 大修館書店 1995
- (5) マーク・Lナップ著 牧野成一・泰子共訳『人間関係における非言語情報伝達』 東海大学出版会 1979
- (6) Wフォン・ラフラー＝エンゲル編著 本名信行編訳『ノンバーバルコミュニケーション』 大修館書店
- (7) マジョリー・Fヴァーカス著 石丸正訳『非言語コミュニケーション』 新潮選書 1987
- (8) エドワード・T・ホール著 岩田慶治/谷泰訳『文化をこえて』 TBS フリタニカ 1993
- (9) 野村雅一著『ボディランゲージを読む』 平凡社 1994
- (10) 『まなざしの人間関係』 井上忠司著 講談社 1982

資料

質問用紙2

性別 《 男 ・ 女 》
年齢 《 歳 》
職業 《 高校生 ・ 大学生 》

- 1 あなたは言語以外のコミュニケーション手段も必要だと思いますか？
《 はい ・ いいえ 》
- 2 あなたは非言語行動を意図的に使っていますか？
《 はい ・ いいえ 》
「はい」と答えた人に聞きます。
どのような時に使いますか？
(例：異性と話すとき・大事な話をする時・・・など)
- 3 あなたの周りの日本人がよく使う非言語行動にはどんなものがありますか？
- 4 あなたは話し相手のどのような部分から表情を読み取りますか？
- 5 あなたの場合、会話の中で身振りや手振りをよく使いますか？
《 はい ・ いいえ 》
- 6 あなたは相手のどこを見て話をしますか？
- 7 あなたは人に見られることに抵抗感がありますか？
《 はい ・ いいえ 》
- 8 あなたは人の視線に不快感を感じることがありますか？
《 はい ・ いいえ 》
「はい」と答えた人に聞きます。
どのような視線に不快感を感じますか？
- 9 あなたは相手のどこを見て話をしますか？
- 10 あなたが視線をそらすのはどんな時ですか？

- 11 あなたは話を聞く時にどこを見ていますか？
- 12 あなたは話し相手によって視線の位置を変えますか？
《 はい ・ いいえ 》
「はい」の人に聞きます。
具体的にどのような人と話しているときに視線を変えますか？
〈例：親しい人と話してるときに目を見る
親しくない人と話している時には胸のあたりをみる・・・など〉
- 13 日本では「人の目を見て話をするのは失礼にあたる」と言われてきましたが、あなたはこれについてどのように考えますか？自由に意見を書いてください。
- 14 あなたは日本人は目を見て話さないと思いますか？
《 はい ・ いいえ 》